

夏休み中、首を長〜くして待っていました

～夏休み中の様子から～




本来、学校という場所は、子どもの笑い声が響き渡り、まるで生きているかのように思えるものですが、夏休みの学校は本当に寂しそうでした。校舎を廻ってみても、児童生徒が一人もいない。教室や廊下や玄関がし〜んとしていました。そんな中でも玄関前のひまわりが大きく育ち、体育館ではバスケットボールと照明の工事が完了し、今か今かとみなさんが来るのを首を長〜くして待っているようでした。また、酷暑であるこの夏、利一用務員さんは、2学期に行われる運動会のために、時間があれば草刈りに勤しむ姿がありました。教職員も植物も学校も、みなさんがやって来る2学期をずっと待っていました。

今から運動会が熱いです！～運動会準備の様子から～



1学期の終わりに校舎のあちらこち
らを覗いて見ると、運動会の準備の姿が
ありました。「まだ1学期なのに、この盛り上がり
と完成度はすごい！」の一言でした。さあ、2学期
を迎えました。みなさんの心に更に燃える魂が入
り、すごい運動会になること間違いなしです。

こんなフルーツが出てくる競技もあるよ！お楽しみに！



日本海を超えていく



日本一からの招待

校長 佐藤雅秀

天候が不順だった夏休みも終わり、今日から2学期がスタートしました。朝、元気に登校する子どもたちの姿を見て、有意義な夏休みを過ごすことができたのだと実感しています。また、1学期の終業式に約束した“元気な姿で2学期に会いましょう”を守ってくれたことに感謝し、2学期にこの子どもたちとどんな学校を作っていこうかなと胸をわくわくさせています。特に2学期は学校行事が多く、活動をとおして子どもたちが成長する学期でもあります。子どもたちの成長のゴールをしっかりとイメージし、教育活動を進めていきますので、保護者や地域の皆様方の御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

さて、今年の夏の話題を一つ。もう夏の風物詩と言っても過言ではない夏の甲子園大会。第104回全国高校野球選手権大会は、宮城県代表の仙台育英高等学校が初優勝し、13度目の正直で優勝旗が初の白河の関越えを果たしたことは皆さんの記憶にも新しいことでしょう。私の夏休みは常に甲子園とともにあると言ってもよく、今夏も可能な限り観戦していました。

優勝した仙台育英高校の試合を見ていたときのことです。アルプススタンドで応援している仙台育英高校の応援団長(野球部員)のはちまきに「日本一からの招待」という言葉が刺繍されていました。これは野球部のスローガンとして室内練習場に掲げられている言葉で、「甲子園の優勝は偶然にできるものではなく、必然的に達成する実力が必要である。日本一を取りに行くのではなく、心技体で日本一の方から招かれるような個人やチームでなければならない。」という思いが込められているのだそうです。技術だけでなく、心の強さや優しさ、協調性といった心情面をも持ち合わせたチームこそが日本一から招待されるにふさわしいチームである、ということはこの言葉は語っています。仙台育英高校は必ずしもスター揃いの突出したチームではありません。部員全員が相当な努力をし、チームとしての機能をそれぞれが果たす。他者を理解し、信頼し、尊敬するだけでなく、困難には全員で考えて最適解を導き出して乗り越える。この姿勢があったからこそその日本一だと考えています。

これは野球に限ったことだけではなく、学校現場にも当てはまります。学校は、様々な個性を持った子どもたちで構成され、様々な学びの場が提供されています。子どもたちは、夢の実現に向けて自己の力量形成のために学び、他者との交流をとおして様々な刺激をお互いに享受し合って、成長していきます。ともに学ぶ仲間、ともに課題を乗り越えていける仲間、ともに喜びや悲しみを感じることができる仲間、ともに叱咤激励できる仲間。そんな仲間がいる集団をつくるのが、延いては自己の成長を大きく促し、夢の実現につながってくるのだと思います。

自分を成長させることで仲間も成長させる。その積み重ねが「日本一(自分の夢)から招待される」にふさわしい人間となるのではないのでしょうか。

保護者の皆様の声から～今年度1学期・新規留学生・保護者様の感想～

当時、小学4年生の娘が「あわしまにしおかぜ留学をしたい！馬と生活したい！」と目を輝かせながら伝えてきたことが懐かしく思い出されます。出発の日も娘は不安よりもワクワクが勝っていて、島での生活を思うと目が輝いていました。実際、島での暮らしがなにより楽しいようで電話での会話や今回夏休み期間帰省してからの会話でも馬と過ごす生活の充実感や島の先生方やお友達、地域の方々の優しさや温かみがとても伝わってきます。親元を離れ、地元の中学では出来ない経験で一回りも二回りも大きく成長させていただいていることにとても感謝しております。これからも素敵な経験がたくさんあることでしょう。周りの方々への感謝を忘れず、一日一日を大切に過ごしてほしいと思います。今後ともよろしく願いいたします。（中学1年 加藤 優月さん 母：咲希さんより）



『想像するだけで、ワクワクドキドキしてきます。』

娘が、しおかぜ留学を希望する理由で、最後に書いていた言葉でした。5年前、粟島の自然体験学校での体験、島のお子さんと遊んだことがとても楽しく、娘は粟島が大好きになりました。10歳という年齢で、親元を離れて暮らすという決断に、驚きました。留学後、何度か粟島に伺い、島の方々に可愛がられている様子や、お友達と楽しく活動する様子に、安心と成長を感じています。皆様からの沢山のご支援に、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。多くの子どもたちが、それぞれに思いを抱いて、しおかぜ留学に挑戦していると思います。留学は勇気もいり、心身ともに鍛え上げられ、将来の力になると思います。私たち両親も好きな粟島で、娘の挑戦を応援しています。そして、親子で粟島を楽しんでいます！今後も、よろしく願いいたします。（小学5年 法性 凜音さん 母：美弥子さんより）



テレビで紹介された、しおかぜ留学をしてみたいと娘が言ったのが小学6年生の時でした。それから2回目のチャレンジで受け入れていただき、中学2年生からの留学スタートとなりました。初めての寮生活は本人にとっても緊張するものだったと思いますが、親にとっても不安でいっぱいの体験となりました。送り出してから数日は心配で落ち着きませんでした。担任の藤巻先生から学校生活の様子を電話でいただいた時、一気に緊張が解けたのを覚えています。その後も電話や学年だより等で活動内容を細かく伝えていただき大変安心出来ました。牧場での馬のお世話、乗馬のレッスンは動物が大好きな娘にとっては何より幸せな時間の様です。冬休みにはどれ位成長しているか楽しみです。お世話になっている先生方、全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。（中学2年 安藤小晴さん 母：弓枝さんより）



小さな頃から動物好きだった息子は「しおかぜ留学」に出会い、期待に満ち溢れ、目をキラキラと輝かせ粟島へ向かいました。コロナ禍で島に向かう前になかなか見学に行くことも出来ず、親としましては多少不安に感じておりましたが、息子の「島は楽しい！」「馬が可愛くて仕方がない！」「島の方が優しくしてくれる」の声を聞き、安心しました。私どもの地元では経験できないような島での体験や島の方々との交流。寮での友達との共同生活を通して一回り成長した息子の姿を嬉しく思うとともに、「しおかぜ留学」に関わって下さる全ての方への感謝の気持ちでいっぱいです。



夏休みで帰郷し、少し気が緩んでいる息子ではありますが、島に戻ったら皆様への感謝の気持ちを忘れず、二学期からも楽しんで生活することを願っております。（中学1年 高橋修真さん 母：幹子さんより）

奨励賞をいただきました

～新潟県少年の主張大会・わたしの主張

村上・岩船地区大会の審査結果から～

8月18日に村上情報センターで予定されていた「新潟県少年の主張大会・わたしの主張村上・岩船地区大会」は、豪雨災害の影響により、書面審査による選出となりました。そのような中で、当校の代表である中学二年生の深沢菜々子さんの主張文が数多くの主張文の中から、見事、奨励賞に選ばれました。その素晴らしい主張内容を御紹介いたします。



私の主張：校内発表の様子

私にできること

粟島浦中学校 二年 深沢 菜々子

この世の中には差別というものが存在します。例えば、男女差別、部落差別、人種差別……。様々な差別が存在しますが、私は今回障害者差別というものについて話したいと思います。

私には七つ年上の姉がいます。姉は生まれつき障害を持っており、小学生の頃から特別支援学級に通っています。私にとっては普通のことと姉が障害を持っていることは特に不思議とは思いませんでした。しかし私が小学生の頃、クラスメイトの一人が「障害者って気持ち悪いよな」と、唐突に話し出したのです。え？なぜ？そんな気持ちになりました。話をしていたクラスメイトたちは、学校にある「わかば」という病気を持った子どもたちのいる学級の皆を見て気持ち悪いと言ったようでした。信じられませんでした。どうして障害を持っているだけでその人を避けるのか。普通の人より少し苦手なことが多いだけなのに、それを配慮して仲良くなろうとは思わないのか。そんなことを考えるようになりました。

そんなときテレビで、障害者の人が殺されたというニュースを見ました。殺した動機は「障害者は不幸しか作れない。」「障害を持つ人は生きる価値がないと思った。」そんな理由でたくさんの人の命を奪ったというのです。

私の中で怒りがふつふつと湧き上がるのがわかりました。生きる価値がない？障害者は気持ち悪い？ふざけないでほしい!!なぜ障害を持っているだけで人間じゃないかのようにになってしまうのか。私達は皆同じ人間なのに……。そんな中一つの考えが頭に浮かびました。……そうだ。この社会がおかしいんだ。

先程出てきた障害者が殺された事件では事件の犯人だけでなく、差別や偏見を生み出している社会側にも問題があるとされています。社会側の問題とは、障害者差別に対する解決法があまり知られていないということと、今の社会が効率や結果を求めすぎているという問題です。日本には障害者の権利や尊厳を保護したり、障害を理由とする差別を禁止する法律、障害者差別解消法という法律がありますが、その存在をほとんどの人が知りません。また、効率や結果を求めすぎて、障害者の雇用が少なくなっています。そうすると、仕事ができないイメージや自分たちとは違うという意識が芽生え、障害者に対して偏見を持ってしまったり、差別が生まれたりするのです。しかし、私達がこの法律を知り、障害者のことを知り、互いのことを認め合えば差別や偏見がなくなっていき、障害者とともに生きる社会ができていくのではないのでしょうか。

この世の中には差別が存在します。例えば男女差別、部落差別、そして障害者差別。差別は今すぐに無くなることはありませんが、小さなことでも行動してみたら、それは誰かを救うことなのかもしれない。あなたの行動で世界が変わるかもしれない。そんなことを考えながら日々を過ごしてみたいかがでしょうか。そうすればこの世界はより良いものになっていくのではないのでしょうか。